「地域医療部会 20 周年に寄せて」

水島中央病院　中務治重

祝 地域医療部会 20 周年

地域医療部会 20 周年おめでとうございます。毎月一回集まって皆で議論し、このたび 2026 年 9 月に第 238 回となり、20 年が経過しました。歴史を感じます。
一か月前、8 月の NHK TV「ダーウィンが来た」が丁度 20 周年の記念番組でした。
番組担当者は単に 20 年の歳月が経過したというのではなく、執念をもって画像を撮影し番組を作ってきたということで、「20 周年」を「20 執念」と表現していました。地域医療部会はこのような「執念」ではないにしてもそれに近いような部会員の熱意が込められた年月であったのではないかと思われます。

地域医療部会 発足当時の状況：医師不足と医療崩壊の危機

始まりは 2004 年に開始された「卒後医師研修制度(新医師臨床研修制度)」でしょう。それまでは新卒医師の大多数は大学の医局に入局し、しっかりトレーニングを受け、医師として一人前になってから地域の医療機関に派遣され、これにより地域の医療が保たれていました。
しかしこの新たな研修制度により新卒医師の多くは大学以外の研修病院での研修を希望するようになり、従って大学医局への入局者が極端に減り、医局による地域病院への医師派遣機能が困難になりました。それだけでなく、医局自体の人員不足により地域病院から医師を帰局させざるを得ない状況もおこり、新聞に「医師の引きはがし」と揶揄されることもありました。
また「医療崩壊」という言葉がメディアに頻回に登場するようになったのもこの頃です。「医療の不確実性を等閑視したメディア、警察、検察の一方的な姿勢が、患者と医師の対立を増幅させ、やがては日本の医療を崩壊させることになる」との論点で小松秀樹医師が警鐘を鳴らしたのは有名です。社会の過度な期待もあり医療や医療安全に向けられる目が厳しくなったことを背景に、中小病院での医師や看護師の不足が深刻化し、中小病院の機能が果たせなくなり、病院がつぶれ、その結果地域医療が成り立たなくなるというのが医療崩壊の図式です。
さらに「今後の医療は大病院と開業医で成り立つ」というような論調が新聞に取り上げられたこともありました。
中小病院長は地域の医療は我々中小病院で成り立っているという自負があるものの、それでも不要で淘汰されていく存在なのか？本当に医師の確保はできるのか？という大きな不安と焦燥が高まるばかりでした。

NPO 岡山医師研修支援機構設立総会

そのような状況下、2006 年岡大医学部臨床講義室で第一回が開催されました。この NPO は「医療現場で求められる良い医師、良い人材を育成する」という理念と「優れた臨床能力に加えて、豊かな人間性とマネジメント能力を有する医師を育成し、その能力を十分に発揮

することによって地域医療の発展に寄与する」との目標を掲げて設立されました。多くの中小病院長はこの NPO に医師派遣機能を多少なりとも期待しながら総会に参加したと思われます。しかし、NPO では研修後の医師を地域の病院に派遣することは構想の範囲になく、「各病院が個別に研修病院と相談して医師派遣をしてもらってください」との結論でした。

その直後に目にしたのは研修医が集まるであろう大学医局や研修病院の担当者に直談判する多くの中小病院長の姿でした。ただどの研修病院関係者も今後どのような研修制度になっていくのかまだ不透明な状態で、当然確約を得られるはずもありません。その中で唯一、医師派遣の可能性を提案してくれた岡大総合診療科の医局長の前に医師派遣を求めて中小病院長の長蛇の列ができたのが今でも目に焼き付いています。

その時に、「中小病院が取り残されてしまう可能性が危惧されている今、医師の確保はもちろん、我々は何をなすべきか？あるいは何ができるか？中小病院の存在意義は？社会における役割は？などのいろんな問題について病院長が集まって勉強や協議をする場が必要なのではないか」と思い、私自身が総会の中でそのような発言をしたような記憶があります。

地域医療部会(略称:部会)第一回

2006 年 9 月 8-9 名の中小病院長が集まり、深刻な医師不足を含め、いったいこれから中小病院はどうなっていくのだろうかという先の見えない不安やそれぞれの危機感を共有しました。ただ同時に、我々は皆同じような厳しい境遇にあるものの、なんとか皆で一緒に考えていけるのではないかという連帯感を感じることもでき、とにかく毎月第一水曜日に皆で集まろうと決めたのが部会第一回でした。

このあたりの経緯は金田病院 金田院長による当時の岡山県医師会報への寄稿(臨場感あふれる筆致)を参照いただくとよいでしょう。

部会の発展とその役割・魅力

部会が今のような各分野で活躍している人たちの大きな集まりになったのは金田院長の広い人脈と勧誘によるところが大きく、また会員同士の医療に対する熱量が発展の原動力になっていると思われます。

部会の一番の財産はそれぞれ社会的に大事な役割を持った会員の皆さんと知り合い仲良くなれること、人脈ネットワークに広がりができることなどが挙げられます。

二番目に私たち医療者が苦労していること、考えていることやそれぞれが持っている情報を皆で共有し、勉強できることでしょう。

この地域医療部会はこれらの大事な役割や財産がある限り今後も継続されるものと思われます。一人の OB として今後の部会に心からエールを送ります。

末筆ながら、部会長の金光病院 難波院長、金田理事長の長年にわたるリーダーシップと岡村一心堂病院 岡村院長・森下病院 森下院長の部会開催へのご尽力、ならびに部会員の皆様の熱意に感謝と敬意を表します。

地域医療部会 20 周年に寄せて

地域医療部会長（医療法人同仁会理事長）　難波　義夫

20 年前、新医師臨床研修制度が始まり、岡山大学を中心に NPO 法人岡山医師研修支援機構が立ち上げられ、我々中小の病院もメンバーになってくださいとの要望がありました。その、立ち上げの会に出て一番に心配したことは、研修医はこれから大病院にしか行かなくなるよねということで、中小の病院には医師が来なくなってしまうという不安しかありませんでした。そこで、有志数人が集まり「どうする？」ということで定期的に情報を交換することにしたのが、この会のはじまりで、毎月、岡大の会議室をお借りして 20 年間続いています。途中、中小病院の院長等だけでなく、大学の先生、大きな病院の院長、県を中心に行政の方、マスコミ、弁護士、社会保険労務士など多くの方々の参加により多方面からの意見を聞くことができるようになりました。大きな功績は、当時の医学部長からの提案で若い医学生を早い時期に現場を見させたいということで中小の地域の医療機関で実習を始めたことでしょう。現在も継続して大学にも貢献できていると思います。しかし、20 年前の心配であった地域への医師派遣の問題は地域枠の医師派遣はあるものの、何も解決していません。

この 20 年間の中で 10 年間県病院協会会長職を務めたことで、行政、大学、大病院の事情、思い等を肌で感じることができました。新しい地域医療構想が始まっていますが、地域ごとに事情が違う中、また、人口減少が進む中、問題は多岐にわたりスムーズに進みそうではありません。要望の主張だけでなく、痛みを伴った対応も求められるのではないでしょうか。その中で地域医療部会がどのように関わっていけるのでしょうか。

“人と出会い、地域医療を考えた 20 年”

矢掛町国民健康保険病院　村上正和

20 年続いた地域医療部会への思いを、少し振り返ってみました。この部会に参加して一番良かったことは、やはり、実際に地域医療を担っている多くの方々と知り合い、さまざまな考え方に触れることができたことです。本当にありがたく、感謝しています。

もう一つ良かったのは、自分の弱音を吐くことができ、それに対して皆さんから助言をいただけたことです。それぞれ立場は違っていても、地域医療の中で同じような問題を抱え、「この苦境をどう乗り越えていくか」を一緒に考えることができました。「傷をなめ合う」というより、皆さんの話を聞くことで、「もう少し頑張ってみよう」と勇気をもらえる会だったように思います。

2006 年 4 月、私は矢掛病院に副院長として赴任しました。私がこの会に参加するようになったきっかけは、赴任して比較的早い時期に、NPO 岡山医師研修支援機構の病院紹介の会場で、遠藤先生から「こんな会があるんだよ」と教えていただき、誘っていただいたことだったと思います。地域医療の現場で迷ったり、困ったりすることが多かっただけに、大学

病院の中会議室や小会議室に集まり、皆さんの顔を見ながら話を聞くことが楽しみになりました。いろいろな意見を聞くことで、自分にはなかった考え方を知り、目の前の困難にもう一度向き合う勇気をもらっていたように思います。

今でもよく覚えているのが、小豆島の故・三宅先生のお話です。「土庄病院では救急車を全部受けるのが当たり前だ」と言われたことに、当時の私は大変驚きました。その頃は、専門外の病気やけがの救急患者をどこまで受け入れるべきか、受け入れた後にどう対応すればよいのか迷うことが多く、病院として救急を断ることもありました。しかし、三宅先生の言葉を聞いて、「専門外だからどうするか」ではなく、「地域の病院として地域を引き受ける」という考え方があるのだと気づかされました。今から振り返ると、この言葉との出会いは、私自身の地域医療に対する考え方を変えた原点の一つだったように思います。

部会が始まった頃は、「地域医療崩壊」「医療崩壊」という言葉が盛んに使われていました。地域で働く医師も少なく、「これから地域医療はどうなっていくのだろう」と、皆が不安を抱えていた時代だったと思います。岡村一心堂病院の故・岡村先生の発想力と行動力にも驚かされました。「パニック値」という言葉を初めて聞いたのも、この頃でした。

ちょうど新しい臨床研修制度が始まった時期でもありました。NPO の集まりなどを通じて、若い医師に地域へ来てもらうためには、自分たちから地域医療の魅力を発信しなければならないと考え、いろいろなことに取り組んでいたように思います。

その後、金田先生のご尽力もあり、医療関係者だけでなく、行政や法律の専門家など、さまざまな立場の方々が参加する大きな会になりました。定期的に顔を合わせることで、多くの情報や助言をいただきました。「自分たちだけが困っているのではない」と知り、また頑張ろうという勇気をもらいました。この部会は、2006 年に中小病院が集まって勉強や協議をする場をつくろうという発想から始まり、間もなく「地域医療病院部会」と名付けられました。その後、参加するメンバーが増える中で「地域医療部会」と名称を変え、活動の幅もさらに広がっていきました。金田先生が 2011 年に岡山県医師会報へ寄稿された文章を見ると、当時すでに第 53 回を数え、医療関係者だけでなく、行政、法律、自治体など、さまざまな立場の方々が参加する会へと広がっていたことがわかります。金田先生の名司会はもちろんですが、コロナ禍では、岡村先生が Web を活用し、この会を途切れさせることなく継続させてくださいました。また、森下先生には毎回部会の記録をまとめていただきました。本当にありがとうございました。

私自身、この会から多くのものを得ることができました。本当に心強かったです。これからも少しでも地域医療や部会の皆様に役立ちそうな情報や、自分が経験したこと、そこから考えたこと、ちょっとほっとするようなことや、元気が出るようなエピソードなどを、皆さんと共に発信していきたいと思っています。そして、この部会の良さがこれまでのように続いていって欲しいと思います。

20 年間を振り返って改めて思うのは、この会は単に情報を得るための会ではなかったということです。人と出会い、自分とは違う考え方を知り、困ったときには支えてもらい、そして地域医療にもう一度向き合う勇気をもらう場でした。

20 年間、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

「地域医療部会 20 年を振り返って」

NPO 岡山医師研修支援機構副理事長・地域医療マネジメント委員長(社会医療法人 緑壮会理事長)　金田道弘

Ⅰ　設立当時

2006 年 6 月 27 日の NPO 岡山医師研修支援機構の設立総会における中務水島中央病院長(当時)からの、「中小病院が集まって協議や勉強する部会を作ってはどうか。」との提案がきっかけとなり、同年 9 月 6 日水曜日から始まった地域医療部会(当初は地域医療病院部会)。毎月第 1 水曜日、19 時から開催し(会場は設立当初は岡山大学医学部会議室、近年は主に岡山県医師会館)、2026 年 9 月、おかげさまで 20 周年を迎えることができました。

振り返ってみると、2006 年 9 月の第 1 回地域医療病院部会の参加メンバーは以下の 9 名の皆様でした。①江澤和彦(倉敷広済病院院長)、②遠藤浩(倉敷リハビリテーション病院院長)、③岡村一博(岡村一心堂病院理事長)、④金田道弘(金田病院院長)、⑤鶴見尚和(成羽病院副院長)、⑥中村隆資(高梁中央病院副院長)、⑦難波義夫(金光病院院長)、⑧原史人(倉敷第一病院院長)、⑨三宅賢一(土庄中央病院院長)でした。(五十音順・敬称略、議事録から)

Ⅱ 10 年目

地域医療部会設立から 10 年目・2016 年の NPO 岡山医師研修支援機構設立 10 年目の節目に、山陽新聞社の「岡山の医療健康ガイド MEDICA」の記事の中で、NPO の糸島理事長(当時)は、「人口減少時代を迎え、地域医療を取り巻く環境は厳しいのでは」との記者の質問に対し、地域医療部会について以下のように答えておられます。

「岡山、広島、香川などの中小病院の理事長や院長、大学の医学部や法学部の教授、マスコミ、弁護士らで地域医療部会を立ち上げ、毎月勉強会を開き、病院経営の在り方や多様な医療ニーズに応えるための病院間の連携などをテーマに議論している。職種や立場の異なる人たちが地域医療の充実や日本の医療の将来像を語り合い連携を図る試みは全国でも例がなく、機構設立による大きな成果といえる。」(原文のまま)

Ⅲ 20 年目

「20 周年記念・第 238 回 NPO 岡山医師研修支援機構・地域医療部会」 は 、2026 年 9 月 2 日水曜日 19 時から、岡山県医師会館でハイブリッド開催され、49 名のご参加でした。主な参加者は、岡山県内(一部広島県・兵庫県)の地域医療の責任を担う病院と診療所の理事長・院長・副院長、基幹型病院の院長、江澤日本医師会常任理事、岡山県保健医療部長・保健医療統括監・医療政策課長・地域医療推進課長、県内の保健所長 3 名、岡山大学地域医療人材育成講座教授 2 名、弁護士 2 名、岡山県医療勤務環境改善支援センターの社会保険労務士 2 名等の皆様(順不同)。江澤日医常任理事からはいつも厚労省・中央社会保険医療協議会(中医協)等で現在協議されている最新情報が提供されます。

地域医療部会のスケジュールは毎回ほぼ決まっています。①難波地域医療部会長(元岡山

県病院協会長・日本病院会常任理事)からご挨拶と情報提供、②辰巳岡山県保健医療部長からご挨拶と情報提供、③則安岡山県保健医療統括監から情報提供、④江澤日本医師会常任理事から情報提供、⑤新メンバーの紹介(部会メンバーの推薦者から)と自己紹介、⑥参加者全員から 1 分間スピーチ、⑦次回・次々回開催日の確認。そして 20 時 50 分には必ず閉会します(会場閉鎖のため)。その後希望者で会場を移して懇親会。なお、毎年 7 月には夏の大懇親会が開催されます。

IV 大切な場

20 年前に 9 名で始まった地域医療部会が 20 年間もこうして毎月続いてきた理由を私なりに考察してみました。最大の理由 3 つとは、❶「楽しい」、❷「勉強になる」、❸「仲間ができる」ではないかと考えました。部会には様々な職種や立場の方がおられますが、それぞれの方にとって楽しく、毎回学べるものがあって、安心の強いネットワークが築ける「大切な場」、が「地域医療部会」ではないかと考えました。

毎回学べることや驚くことが盛りだくさんです。9 月部会で私が最も驚いたことは、同年代の辻岡山赤十字病院名誉院長(岡山県バスケットボール協会長、日本醫師バスケットボール大会長)が、ギリシャ・アテネで開催された第 13 回欧州ベテランバスケットボール選手権大会に選手として出場されたことでした。耳を疑いすぐにご本人に確認しましたが、「見学」ではなく間違いなく「選手」としての参加でした。多くのメンバーが元気や活力をもらえたお話でした。

V おわりに

地域医療部会を長年牽引してくださっている難波地域医療部会長、メンバーへの部会案内メールの発信・会場準備・ハイブリッドの準備設営・懇親会を毎回担当してくださる岡村一心堂病院岡村院長、毎回議事録を作成し懇親会も担当してくださる森下病院森下院長(岡山県病院協会長)、いつも会場をお貸しくださる内田岡山県医師会長、そしていつも温かく私たちの活動を見守りご支援くださる忠田 NPO 岡山医師研修支援機構理事長はじめ関係するすべての皆様に、改めて心より感謝申し上げます。